少女ジグザグ暴走中

上葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
少女ジグザグ暴走中

【Ｎコード】
Ｎ９８６１Ｘ

【作者名】
上葵

【あらすじ】
幼なじみのお願いで、昔学校にあった変なクラブの復活を手伝うことになったけど、正直ダルいので、また明日から頑張ればいいや。

0（前書き）

長い生暖かい目で見守っていただければ幸いです。
基本テイストとしてはギャグ：シュール　：真面目を６：４：０でお届け出来たらな、思っております。たぶんダレますが、その旨ご了承ください。

0

乾燥しきった埃まみれの気流が、カビ臭さを伴って俺の鼻孔を刺激した。
最悪だ、全くもってついていない。クリーム色のカーテンを透過する光にぼんやり照らされた室内は、ガラクタだらけの廃棄場のようで、用途不明の鉄パイプが墓標めいた影を落としている。
「骨が折れそうね」
ドアを開けた彼女はこれから始まる引っ越し作業を想像してか、げんなりとした息をはいた。

隣で関節の空気を抜くように伸びをする。冷静になっておかれた状況をまとめるのならば、
この学校にあったという変な部活に所属したいが、もうすでに廃部になっていたので、復活させるしかないでしょ、とのこと。
顧問していた先生に相談してみたところ、部員の確保と部室の掃除をやるなら、また担当してやってもいいと了承をくださったので、先ずは部室の確保に乗り出したというわけである。

「それじゃ、箒で床を払っておくから、郁次郎は一階の準備室に余った机を運んでおいて」
キラキラと反射する埃の粒子を鑑みるに掃き掃除は確かに必要だろう。だがしかし、それは床を荷物が占拠してなければの話である。
「ちょっとまてよ、俺の負担が半端なくないか」
「気のせいよ」
「そうか、気のせいか」
ちなみに現在位置は三階、ここから一階の学習準備室までは天竺の道並みに遠い。
「なわけあるか！」

ワンテンポおいて叫んだ俺に冷めきった瞳で視線を贈る谷崎。殴るぞ。
「ちゃっちなノリツッコミぃ。天下への道のりは遠いわね。罰としてこの机を一階まで運びなさい」
「天下なんざ目指してねぇーし。いいからそっちの端を持て。いっしょに運ぶぞ」
一番厄介そうな質量を持つ予備の教卓に手をかける。
「人にものを頼むにはそれ相応の態度というものがあるんじゃない？」
「あのなー、俺はあくまでもお手伝いなんだぜ？」
「お手伝いさんなら、四の五言わずに作業をすべきね」
「完全善意のボランティアに対して多く求めないでください」
ぐちぐち言いつつ、机の端をしぶしぶ持つ。

整った顔立ちをもつ少女、谷崎琴音。彼女と仲良く会話できるだけで俺のパラメーターは他の人より多めにラックの種を食べたことがわかるのに、幼なじみともなれば、思春期を迎えた気分はラッキーマンだ。
「それじゃ、一階までね」
確認してから、教卓の予備を持ちあげる。夕焼けに支配された廊下をえっちらおっちら運んでいくそのさまは、端からみたらアリさんマークの引っ越しセンターのロゴのようになっていることだろう。こう、シルエット的にね。

「このまま運んでてもつまらないから、なにか歌でも歌わない？」
「歌？どんなだよ」
黙々とした作業から出し抜けに提案してきた。背後に気を配りながら茜色が落ちた階段をくだる俺にそんな余裕はない。
「そうね、郁次郎が好きな曲でいいわよ。なにかない？」
「そうだな、んじゃ、森のくまさん」

とはいえ脳裡に天恵に等しいグッドアイデアが降りてくる。さすが、おれ。
「なんでまた。流行歌とかでいいじゃない」
「ただし、あれだ。俺が本体の方歌うから谷崎は合いの手というか、替え歌の部分を歌ってくれよ」
「替え歌って、ある貧血ー、みたいな？」
「そうそう、そんな感じ。んじゃいくぜ、ある日」
「貧血ー♪」
眉間にハテナのシワを寄せながらもしっかりと従ってくれる辺り彼女は天然だ。にやけが止まらない。
「森のなか」
「浣腸ー♪」
「くまさんに」
「ニンニクー♪」
「出会った」
「たんこぶー♪」
「花咲森の道」
「チ〇コ」
よしゃあぁぁー！いただきました！
普段クールぶってる谷崎さんの口から容易く卑猥な単語をはかせるなんて、やっぱり俺は天才かもしれん！
「くまさんにであったぁ」
「たんこぶー、……ねぇ、そんなににやけて、なにがいったい面白いの？」
「べつにぃ」
知らなくてもいい世界というのがあるんだよ。
いやしかしこんなにもしれっと禁止用語吐くなんて彼女はバカなのかもしれない。
「一つ考えたんだけど」

もうなんていうか、戦後一週間の日本のほうがよっぽどきれいだよ！って感じの室内。
部室（便宜上そう呼ばせてもらう）に戻って、彼女は小さく呟いた。
「人手が、必要だと思うの」
「気づくのがおそすぎたね」
「やっぱり部員の確保を優先すべきだったかな」
まぁ、まず誰も所属したいとは思わないだろうけどね。
気持ちを新たに、別の机に手を掛けて、一階まで持っていこうと、持ち上げる。ひたすらその作業の繰り返しだ。
その一つを担いだ時だった。斜めにしたからか、中に入っていたらしい古雑誌が滑り落ちて、パタンと床に転がった。
む、これは、
「谷崎」
「なによ」
拾い上げながら、一種感動に似た懐かしさが俺に去来する。
「休憩しようぜ！」
「もしかして、その手に持ったジャンプに目を通そうとしてるわけじゃないよね」
「四年前のだぞ、気になるだろ」
当時の連載陣を思い浮かべる。
「最近は猫も杓子も新連載起こしすぎだよね。もうちょっと長い目で作品を見守っていかないと。つうか、長期連載陣の引き延ばしが見苦しいよな。昔みたくきりがいいところで終わらせてやりゃいいのに」
「掃除続けるの！ほら、さっさと机を運ぶ！」
「えーい、うるさい！女にはカピカピになった拾い物の雑誌の価値がわからないんだー！」
俺の訴えはあえなく却下され、しかたなしに作業に戻る。

いくら若い体力をもて余していようと、数分もこんなこと繰り返してれば、ばっちり肩で息をするようになっていた。
「小学校の時の朝礼で一つ覚えてるのがあってさ」
階段の登り降りに膝が悲鳴をあげ始めた、そんな折り語りだす谷崎琴音女史。目が憔悴しきっている。
「ほら、校長が話すじゃない？その一つで」
「校長って、いつも朝礼が始まる前に、君たちが静かになるまで何分かかりました、って嫌味たらしく言うあのハゲ？」
「そうだけど……」
俺と彼女は同じ小学校の出身である。ちなみに幼稚園、小学校、中学校、高校までフルコンボで同じクラスだ。大学でも、もう一回遊べるどーん、とかになりそうで恐い。いや、喜ぶべきことなんだろうけど。
脱線した。とにもかくにもあの、あら瓶土瓶ハゲ茶瓶の愛すべき中年オヤジの話を、谷崎は切り出してきたのだ。
「校長いわく、道に落ちてるゴミを１００個拾うのに１００人いれば一秒ですむ」
「えーと、やっぱりイナバ、１００人乗っても」
「違うわよ！」
「すまん、ちょっと何が言いたいのかわからない」
「ようは数は力。人は城、人は石垣。部員さえいればこんな苦労ちゃっちゃっとですむのに、ってこと」
「いやー、無理だと思うよ」
一度きりの高校生活を、訳のわからない倶楽部で消費したいと考えるバカはいないだろう。
「むぅ」と俺の意見が納得いかないらしい谷崎は頬を膨らませて、睨み付けてきた。
「どうしてそう思うの？」
「そもそも発足できるかも怪しいじゃん。落語部とか誰も興味ないし」

その部活の活動が、まったくもってふざけたものなのである。なんだっけ？古今東西あらゆる落語を追及する、だっけ？あほか。
「娯楽ら部！娯楽と倶楽部と愛するのＬＯＶＥがかかってるの！」
あ、そうか、そうそうそれそれ。
「いい加減覚えてよ。郁次郎も入ってるんだから！」
「おい、ちょっとまて。俺は協力するとは言ったが、一度も入部するとは言ってないぞ」
「協力するイコール入部でしょ。違う？」
「ちゃうわい！大体渡された診断テストみたいなのはビリビリにして、目の前で捨てただろ！」

今朝のことだ。俺の机に一枚の胡散臭いプリントが入っていた。抜粋して記載させてもらうと、
【Ｑ，あなたの学校生活は充実していますか？
ｙｅｓ→もっと充実させるため、娯楽ら部に入ろう！
ｎｏ→娯楽ら部なら明るい青春をおくれるよ！】
【Ｑ，友達はいますか？
ｙｅｓ→本物の友情ってやつを娯楽ら部なら体験できる！
ｎｏ→娯楽ら部に入って友達を増やそう！】
【Ｑ，娯楽ら部に入部しますか？
ｙｅｓ→入部届けは１年２組谷崎蓮華まで！
ｎｏ→死ね！】
ちなみに俺は死を宣告されました。
進研ゼミの促進漫画や新興宗教の電話のがよっぽど信用度が高い。

「俺は部員が４人以上になったら入ってやる、それまではただの協力者だ！って言ったよな、確かに」
ちなみにうちの学校、羽路高校の最低部員数は５名であり、ようは、発足出来ないようなら諦めな、という幼なじみの良心的な線引きなのである。いや、正確には妥協である。

「私が四人分になる」
キリッ、って言われても。
「なにアホなこと宣ってはるんですか」
俺が今まで吐いてきた、ため息の数は、谷崎のアホな発言数でもある。
「部員ならいるじゃない。私たちの心のなかに」
「先生の前でも使える言い訳を用意しろよ」
「先生には私の隣の彼らが見えないんですかっ？てのはどう」
「スクールカウンセラー行きだと思う」
あぁ、なんだって5月の新緑が美しく陽光降り注ぐ爽やかな季節に、幼なじみと放課後まで居残ってこんな不毛な会話をしてるんだろうか、俺は。
歯車が狂いだしたのは、そう、あの夏。何処までも純粋で清純だった当時13歳の谷崎琴音が出会った、あの女。端正な顔立ちの癖に馬鹿げたことを行うギャップに、なぜだか知らないが、中1の谷崎は無性に惹かれたのだ。そのバカ女が件の娯楽ら部の所属だった、ただそれだけのこと。
「決めた！」
「訊きたくないけど、訊いとくよ。なにが？」
以来、俺の幼なじみは誰もが羨む美少女から、変なことを行う残念美少女に降格してしまったのだ。その女の人と『私、必ず羽路高校行って、娯楽ら部に入ります！』と指切りげんまんしていた蓮華の指を、過去に戻れることならそっとほどいてやりたい。
「本気で勧誘をしよう！」
「初めて具体的な方策が飛び出したところ悪いんだけど、部活のスカウト週間は4月に終わっちゃってるよ」
ちなみに一ヶ月間、彼女はなにしてたかというと、娯楽ら部を探し回ってました。そんな出落ちみたいな部活が生き残ってるわけないでしょうが！

それから３０分くらい机の片付けを行い、どうにかこうにか部室としての体裁を取り戻した室内は、残すところ掃き掃除と拭き掃除を行うだけとなった。疲れてあげることのできなくなった腕をダランダランと杓死のように揺らしながら、
「この地球儀とか本はそのまんまでいいのか？」
「それらは部室の備品よ。そのままにしといて」
「この段ボールに手書きの日本地図はゴミ箱でいいだろ」
「ため！そのままにしとくの！」
埃を被ったガラクタの処分について聞いていく。絶対この部屋自体が他の部活の物置にされてただけだって。元からあったもんじゃねーだろ。
「はぁー疲れたー」
とにもかくにもようやく物運びが終わったのだ。パイプ椅子に腰掛け、白い長テーブルに伏せるように体を伸ばす。
「今日はもう帰ろーぜ」
「そうね」
日はすでに落ち、臼暗闇に室内は支配されている。さっさと帰って寝たい。
「郁次郎、今日はありがと」
「どーいたしましてー」
「それじゃ、明日は部員勧誘頑張りましょ」
「……」
こいつ話聞いてなかったな。
「だから勧誘期間は終わってるつぅの。残された手段は精々ポスター貼るくらいしかねーよ」
顔をガバリと上げて異議を申し立てる。先程もそう申しましたよね。
「私たちがするのは勧誘じゃないの」
やべぇ、たち、って俺も確実に部員にカウントされてるよ。
「引き込みよ」

「はあ？」
「だから、狙った人物は確実に引き込む。以上」
「つまり勧誘じゃないと？」
「ええ、引き込みですもの」
「勧誘です！」
世間ではそういうのを勧誘って言うんです。
「だから私は明日までに娯楽ら部にピッタシの人物を選別しておくわ」
わあお、クレイジー。

時計を見れば、もうすでにいつもの帰宅時間を一時間以上もオーバーしていた。これ以上ここでグダグダやってると、サラリーマンの帰宅ラッシュに巻き込まれてしまう。
なんだか要領を得ないまま、俺たちの娯楽ら部復活記がスタートしたのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9861x/

少女ジグザグ暴走中

2011年10月28日04時24分発行